

## 曲目解説

### New York, gran. Marcia sinfonica op. 422

( 交響的大行進曲「ニューヨーク」作品 422 )

Giuseppe manente ( ジュゼッペ・マネンテ ) 作曲

中野二郎 編曲



Giuseppe Manente

作者は 1862 年 2 月 3 日イタリアのサンニオのモルコーネに生まれ、1941 年ローマで没した作曲家である。音楽家を父にもち、王立陸軍学校付属の軍楽学校に入り、1903 年、歩兵第三連隊軍楽隊長になり、幻想曲「降誕祭の夜」、序曲「国境なし」、幻想曲「華燭の祭典」、「マンドリン芸術」、「小英雄」そして最高傑作と言われる「メリアの平原にて」等の力作を発表し賞讃を得た。交響的大行進曲「ニューヨーク」は、作者が第一次欧州大戦後(1918 年)イタリアの吹奏楽団を率いて北米に招かれ、各地で戦勝記念演奏会を開いたが、その時の印象に基づいた吹奏楽曲で作品 422 番。本曲のイタリアでの出版譜には当時であっては珍しかったのか、ビルの建ち並ぶニューヨーク市街の写真が添えられている。曲は 4 小節の力強い前奏に続き第二マンドリン、

マンドチェロにより主題が示される。4 小節毎に繰り返される主題は 2 度ずつ高くなり 48 小節目から副主題をマンドラが受け継ぎその後第一マンドリン、第二マンドリンがいかに吹奏楽のフレーズらしいアルペジオを奏す。123 小節目からの Grandioso から第一マンドリン、第二マンドリン、マンドラが副主題、マンドチェロ、ギター、ベースが主題を奏し前後の ff(強奏)の間に P(弱奏)の部分が挟まれて、戦争に勝って意気盛んなニューヨークの摩天楼を表しているかのようなのである。1976 年 4 月 3 日同志社大学マンドリンクラブ静岡演奏会(静岡市公会堂)にて本邦初演。

### Elegia

Eugenio Giudici ( ユージェニオ・ジュディッチ ) 作曲

( 挽歌 )



Eugenio Giudich

作者は 1874 年 10 月 13 日ベルガモに生まれ、1949 年 11 月 11 日同地で亡くなった。ドニゼッティ音楽院に入り、和声、フルート、作曲を学び、その後ポーニャ音楽院に移りここで作曲と吹奏楽を学んだ。マンドロンチェロとマンドリンオーケストラの為に書かれた「古潭」「牧歌」等の作品は広く親しまれており、A. Amadei を名誉会長にそして「グラウコの悲しみ」の作者 A. Mazzola を首席ギター奏者に置くベルガモマンドリン合奏団の常任指揮者であった。Elegia(挽歌)と題されたこの曲は Giudici の代表作であるが、悲しみの詩、死者への哀悼の詩という意味合いを持っている。曲は各パートのユニゾンにより暗く、重々しく始まる。不安げなパッセージを幾度か経た後、一転して曲想が変わり、マンドラ、マンドチェロが悲しみに満ちた心をなだめるかの様に穏やかに歌う。その後、再び不安の表情が現れ冒頭の部分がもう一度繰り返される。その後アフレッタンドに入り、爆発的に心の激情を述べたあと、曲は 3/4 拍子へと移る。ここで走馬燈のように人間の生涯が流れるのである。それから曲は落ち着きを取り戻しクライマックスを迎え、その後 4/4 拍子に戻る。そこではもう、

初めの暗さ悲しみというものはない。そして今一度、盛り上がりを見せてから静かに終わる。

## Terza Piccola Suite op, 39

Giulio de Micheli (ジュリオ・デ・ミケーリ) 作曲

( 第三小組曲 作品 39 )

中野二郎 編曲



*Giulio de Micheli*

作者は 1889 年にイタリア北部のリグリア州ラ・スペツィアで生まれた作曲家でヴァイオリニスト。5 歳の頃からヴァイオリンを学び、15 歳で学位を取得後、パルマのボイト音学院に移りロメ・フランツォーニ氏に師事した。5 年後には最高の成績で教授の資格をとったが、そのまま音学院に残り、イターロ・アツォーニ氏に師事して対位法を学んだ。26 歳の時にブリュッセル のトムソ音楽学校に入学し、ヴァイオリンのヴィルトゥオーソとして大賞を得たのに続き、チューヒ音学院校長のアンドレア・フォルクマー氏に師事し作曲を学んだ後、1927 年にはイタリアに帰国し、生地に定住して作曲、音楽評論などにも活躍した。またヴァイオリニストとしてもヨーロッパの多くの都市や果てはエジプトにまで演奏旅行を行い、各地で成功を収めた。晩年はベルガモ近郊のコヴォに移り住み、1940 年に没した。作品の数は約 160 曲を数え、その多くが管弦楽の為の作品で、当時彼の作品をレパートリーに入れられないオーケストラは無い程だったと言われ、オペレッタ「葡萄畑の恋」等は度々ラジオで放送されたらしい。代表作には小組曲のシリーズ(福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルとしては「第二小組曲」を昨年(2019)の第 33 回定期演奏会で演奏)を始め、「舞踏組曲」「アルカディア組曲」「エジプトの幻影」等、15 の組曲や、2 つの交響的前奏曲、8 曲のオペレッタ等がある。彼の音楽の根幹をなす特徴は『詩的な音楽』であり、半音階的な手法と叙情性の絶妙のバランスは特筆に値するものである。本曲は 1981 年 8 月 10 日同志社大学マンドリンクラブ第 6 回東京演奏会(浅草公会堂)にて本邦初演。以後、マンドリン合奏曲の貴重なレパートリーとして関西、関東を中心に演奏されているが、マンドリンを中心に演奏難度が非常に高い為、再演の回数も少なく誠に残念でもある。同志社大学マンドリンクラブ第 6 回東京演奏会のパンフレットから編曲者の中野二郎氏が曲目解説した文面を以下の様に引用する。

この作者の組曲「エジプトの幻影」は、従来のマンドリン曲に無かった新鮮な味があったが、本曲(第三小組曲)は更に大胆かつ演奏上の難点に満ちているので、編曲を幾度も躊躇したものである。歴代の指揮者に、このことに就いてはしばしば口をすべらしているのが、難曲ときくと一層闘志が燃えるらしく久しく要望されていたので、遂に成否を度外視して編曲に踏み切った。というのは、今までに馴染みのない調と拍子の変化転調の激しいことである。曲は四つの楽章に分かれ、1.黄昏 2.月光セレナータ 3.夜明け 4. 太陽讃歌 で 黄昏では、五拍子と四拍子が入り組み、馴染みやすい調を假に移調すれば転調(途中)するので演奏上の難点は去らないし、又原調は尊重したいのである。月光セレナータは以前、月へのセレナータとして単独に定演に出したものであるが、これは、ホ長調と変ロ長調で比較的穏やかであるが、夜明けでは変ト長調を使用している(六つのフラット)どの楽器も開放弦を殆ど使用することが出来ない。更に太陽讃歌では、二拍子と三拍子が入り混り、転調の激しさで息継ぐ暇がない。夕方から夜を経て朝の太陽を迎えるまでを描いたもので、原曲に指示してある各楽章の長さは 1.黄昏 四分半 2.月光セレナータ 四分半 3.夜明け 六分 4. 太陽讃歌 三分 計 18 分となっている。原曲は大編成の管弦楽曲で作品 39 番。マンドリンオーケストラでは、管弦楽のような音色の変化は求められないので、又一種の異った味わい深いものになるだろう。

## L'Allegra Brigata (ouverture)

Giuseppe Sirlen milanesi (ジュゼッパ・ミラネージ) 作曲

(愉快的仲間)

作者は 1891 年 3 月 26 日イタリアのバッタローネ生まれ、1950 年 12 月 4 日ミラノに逝った作曲家。ミラノの音楽学校卒業。作品はオペレッタや管弦楽曲など多岐にわたっており、弦楽四重奏曲や吹奏楽曲の作曲コンクールに入賞した。特に人材の乏しいマンドリン界では新進気鋭の作曲家として注目を浴びた。マンドリン作品では 1921 年「イル・プレットロ」誌主催の作曲コンクール第 1 部門(プレクトラム四重奏曲)に「四重奏曲」が 2 位に入賞し、第 3 部門 D の部(マンドリンソロまたはギターソロ)に「サラバンドとフーガ」が 1 位入賞した。1923 年には、イタリアマンドリン連盟主催の全イタリアマンドリン四重奏演奏コンクール課題曲選定の為の、四重奏曲作曲コンクールにて「春に寄す」が 1 位入賞した。ミラネージはマンドリン曲に多く Sirlen Della Lanca の筆名を用いた。本曲は 1940 年イタリアのシエナで行われた第 1 回マンドリン合奏曲の作曲コンクールに応募、V.Cerrai の「チャルダス」D.Berruiti の「苦惱- 前奏曲」「軽率な巡邏」I.Bitelli の「中世の城のほとり」と共に 4 位に入賞した序曲である。この時のコンクールでは 1 位は該当作品はなく、2 位に C.Otello.Ratta の「チュニジアのイタリア人- 東洋風舞曲」、3 位に A.Montanari の「海の印象」が入賞している。本曲は未出版に終わり、シエナ・マンドリン合奏団の指揮者 A.Bocci 氏によって保管されていたものを同志社大学マンドリンクラブの OB 岡村光玉氏が本邦に紹介した曲である。1976 年 4 月 3 日同志社大学マンドリンクラブ静岡演奏会(静岡市公会堂)にて本邦初演。以後、マンドリン合奏曲の貴重なレパートリーとして関西、関東を中心に演奏されているが、全体的に演奏難度が高い為、ジュリオ・デ・ミケーリの第三小組曲同様、再演の回数も少なく誠に残念でもある。作者の作品は福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルとしては、第 31 回定期演奏会(1999 年 10 月 30 日)の「主題と変奏」の演奏以来である。

## Suite “Algerienne” op. 60

Camille Saint-Saens (カミーユ・サン=サーンス) 作曲

(アルジェリア組曲 作品 60)

佐藤洋志 編曲

19 世紀半ば過ぎ、ヨーロッパの楽壇には東洋その他を題材にしたエキゾティズムが流行したが、この「アルジェリア組曲」もその 1 つの表れである。当時フランスの植民地であったアルジェリアを作者は大変愛していた。若い頃から何度も訪れ、その印象を 4 つの小品にまとめたものがこの組曲となった。スコア冒頭に「アルジェリアへの航海の絵画的印象」と書かれているようにエキゾチックな雰囲気は支配するなか端麗な音楽が劇的ではなく穏やかに爽やかに進行する。1880 年 12 月 19 日、シャトレ座(E.コロンヌ指揮)にて管弦楽の組曲として初演。45 歳円熟期の作品である。

第 1 曲 前奏曲・アルジェの街～大きなうねりに再び翻弄されると、船橋からアルジェの街並みが遠望された。色々な雑踏の音がにぎやかに聞こえる中で“アッラーの神万歳! アッラーの預言者マホメット”という叫びがきわだっている。最後の一揺れとともに、船は港に錨を降ろす。

第 2 曲 ムーア風な狂詩曲～旧市街のいくつもあるムーア風のカフェで、アラブ人達は、フルート、ルバーブ、長太鼓の調べに乗って、なまめかしい官能と放縦をくり返すいつもの踊りに身を委ねる。(ルバーブはアラビア起源の胡弓に似た擦弦楽器。)

第 3 曲 タベの幻想・ブリダにて～オアシスのヤシの木の下、夜の香りが漂い、遠くから愛の歌とフルートに愛でられたリフレインが聴こえる。この曲は「東洋の空想」の題名で 1 年前に初演され、この成功に気を良くして組曲が作られたと

も言われている。

第4曲 フランス軍隊行進曲～アルジェに戻る。市場とムーア人のカフェの絵の様な風景の中にフランス連隊の速歩が聞こえる。その勇ましい足音は、オリエントの風変わりなリズム、物憂げなメロディと見事なコントラストをくり広げる。

本曲の編曲は、佐藤洋志氏がクリスタル・マンドリン・アンサンブル(マンドリン奏者である青山忠氏が主宰)の為に編曲、第17回定期演奏会(2001年3月4日東京都武蔵野市民文化会館小ホール)にて演奏され大好評を得た。船橋に立つと朝霧の中からアルジェの街並が徐々に立ち現れて来る、そんな世界が原曲とは違った弦のみの編成から鮮やかに生まれ、そして音が幾つにも重なって行く。原曲とは趣の異なった透明感のある「輝かしさ」が感じられる。Divを随所に用いて音色の重なりに変化をつけ、soloやsoliでコンチェルト風であったり、その編曲技法には原曲である管弦楽を超えたマンドリンアンサンブルならではの色彩感や雰囲気を伴う絵画的な世界を繰り広げている。今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。



**編曲者紹介** 佐藤洋志(さとうひろし) 1968年東京都三鷹市生まれ。中学時代にクラシック音楽に目覚める。慶應義塾志木高等学校でマンドリンクラブに入部、マンドリンを始める。大学時には、JMJ主催第51回青少年音楽祭に参加。今村能氏のもとでコンサートマスターを務め、好評を博す。同時期、慶應義塾志木高等学校や跡見女子短期大学マンドリンクラブなどで指揮や編曲活動を行い後輩の指導にあたる。現在、メトロポリタン・マンドリン・オーケストラでコンサートマスターを務める。このほか、マンドリニスト青山忠氏が主催する「クリスタル・マンドリン・アンサンブル」や「ささざきゆづると奥多摩くわるととドットコム」などで活動中。マンドリンを遠藤隆巳氏に師事。

## カミーユ・サン=サーンス(Camille Saint-Saens 1835~1921) あや かげ 彩と翳

1835年パリでカミーユ・サン=サーンスは生まれた。早熟の天才といわれた彼の最初の作品には1841年5月15日の日付と5才半という年令が表紙に書かれており、モーツァルトのピアノ協奏曲K.450でピアニストとしてデビューしたのは10才の時であった。1871年には、フランスの作曲家による管弦楽曲や室内楽曲演奏を目的とする国民音楽協会を創設し国家記念碑的に活躍したが、私生活では不幸が多く1878年、二歳半の長男が五階の窓から転落、六週間後には次男が肺炎で、立て続けにこの世を去る。それ以来、夫婦の間もうまく行かず、1881年に事実上離婚している。1888年に彼の母親が亡くなると、翌年にはアパルトマンも引き払い、旅行ばかりする生活に溺れてしまった。子供と母親を亡くすという不幸に見舞われたにも関わらず、彼がどんな反応をしたのかほとんど分かっていない。哀悼を表わすような主要作品を一つも作曲していない。息子や母親を亡くした直後の一年、世間との交際も大幅に断っている。「沈黙」どうやらサン=サーンスが外に向かって悲しみを主張できる手段は、沈黙だけだったのではないだろうか。自分の感情をうまく表現する事が出来ず、何も言わずに居るままにしか居られなかったのかもしれない。最後に、サン=サーンスが冷淡な人間ではなかったという反証として、作曲家フォーレの息子達を、まるで彼らの本当の伯父の様に接してかわいがっていたという事実をあげておきたい。19世紀ロマン主義の時代。自己の心情や体験を音楽に直接投影することこそが、作曲の基本的な原動力でもあったこの時期そういった姿勢をほとんど見せることのなかった類稀な作曲家である。